



摘果作業を学ぶ

桜の聖母短期大学や福島大学など、国見町の資源や課題を研究テーマとした、大学生達の活動が始まっています。

5月11日、福島大学の教員・院生9人（代表・菊地芳朗教授）が、国見の歴史遺産・伝統活動について現地調査を行いました。自然と歴史が調和した国見町の景観と環境をどのように守り、町が取り組む「歴史を活かしたまちづくり」につなげていくか、地元の方々に聞き取りをしながら考えました。

## 大学生が 国見を 考える 域学連携 スタート

国見町は、福島大学、桜の聖母短期大学、東海大学と連携し、大学の専門性と学生の若い力で、町の活性化や人材育成を目指します。



地域の伝統活動と歴史を学ぶ  
(鳥取福源寺)

5月17日、桜の聖母短期大学の教員・学生27人（代表：池田洋子教授）が、町の歴史・文化について学び、果樹農家の協力による農業体験を実施しました。大学と町は今年度連携協定を締結し（詳細5月号）、現在は「食育」と「農業振興」をテーマに事業を進めています。今後、学生達は国見の文化と農業を学び、農産物を使った特産品やメニューの開発に取り組んでいきます。

## 教えてください！！ 国見町の歴史

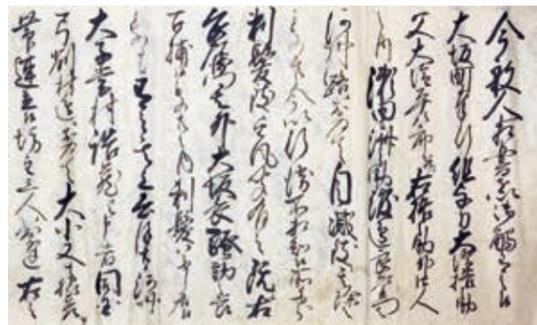
古い写真、地図、道具、お祭り……。かつて存在した身近なモノを探しています。かけがえのない文化や歴史を将来に残し、国見町の宝としていくために、ぜひ皆さんがご存知の情報をお寄せください。

◆連絡先 企画情報課歴史まちづくり推進室  
☎ 585-2967

《大塩平八郎の乱の指名手配書を発見》

写真は、1837年に起きた大塩平八郎の乱に関する人物の人相書（指名手配書）を、写し書きした古文書です。大阪で起きた反乱関係者の指名手配書が、御触れとして国見にも伝わり逃亡者の捜索が行われ

ました。事件の大きさと人々の驚きが分かる貴重な史料が、発見されました。このほか、昭和初期の町並みを撮影した写真などの情報提供をいただきました。



発見された古文書

(2～3行目には「大坂町奉行組与力大塩格之助父大塩平八郎」と親子の名前がみえる)

## 義経に寄り添う しずかざくら 「静桜」植樹



静御前が義経の菩提を弔うために植えたのが名の起こりといわれる「静桜」

静御前が義経の討死を知り、一本の桜を野沢の地に植え、義経の菩提を弔ったのが静桜の名の起こりといわれています。

現在、原木を接ぎ木したものが久喜市の静御前の墓所と平泉にあるのみです。静桜は、ソメイヨシノのよう



な一般の桜に比べ、花期の訪れが遅く、4月中旬から開花します。花は、5枚の花弁の中に旗弁といっておしべが花びらのように変化したものが混じる特殊な咲き方をします。このことから、開花した様子は一見、八重と一重が混じったように見え、他の桜とは趣を異にした風情を見せています。

(久喜市栗橋観光協会から写真・資料提供)

## Interview



氏家博昭さん



佐藤榮壽さん

幼木が、ともに成長していく様子をみんなで見守り、大切にしていきたいです。

5月9日「義経の腰掛松」の跡地に、静御前（義経の愛妾）の墓所に咲く「静桜」の苗木1本が氏家博昭さん（文化財保護審議会委員）を通して提供され、太田久雄町長ほか文化財ボランティアや町内の皆さんに見守られ植樹されました。

「義経の腰掛松」（二代目）は、源義経の伝説が伝わる樹齢約250年以上の名木で、江戸時代後期に植樹されて以降、長く地域の人々や旅人に親しまれてきました。

しかし、樹勢に衰えがみられ、美しい笠松の樹形は徐々に失われ、薬剤散布などで養生してきましたが、最後に残った幹が昨年夏の猛暑の影響で枯死したため今年3月に伐採、抜根されました。

今回、接穂した後継松（三代目）が育つ同じ「義経の腰掛松」の跡地に「静桜」を植樹したことにより、2人仲良く寄り添い、国見の未来を見守ってくれることでしょう。

日本花の会の協力により、三代目の義経の腰掛松の側に静御前の伝説が残されている「静桜」を町の協力により植樹することができました。これからどんな花が咲くのかを楽しみに見守っていききたいと思います。

「義経の腰掛松」と「静桜」が並ぶ様子は素晴らしいです。生前離れ離れになった源義経と静御前の名前を持つ松と桜が、国見の地で再び一緒になることにロマンを感じます。町の魅力としてPR出来るのではないのでしょうか。この2本の